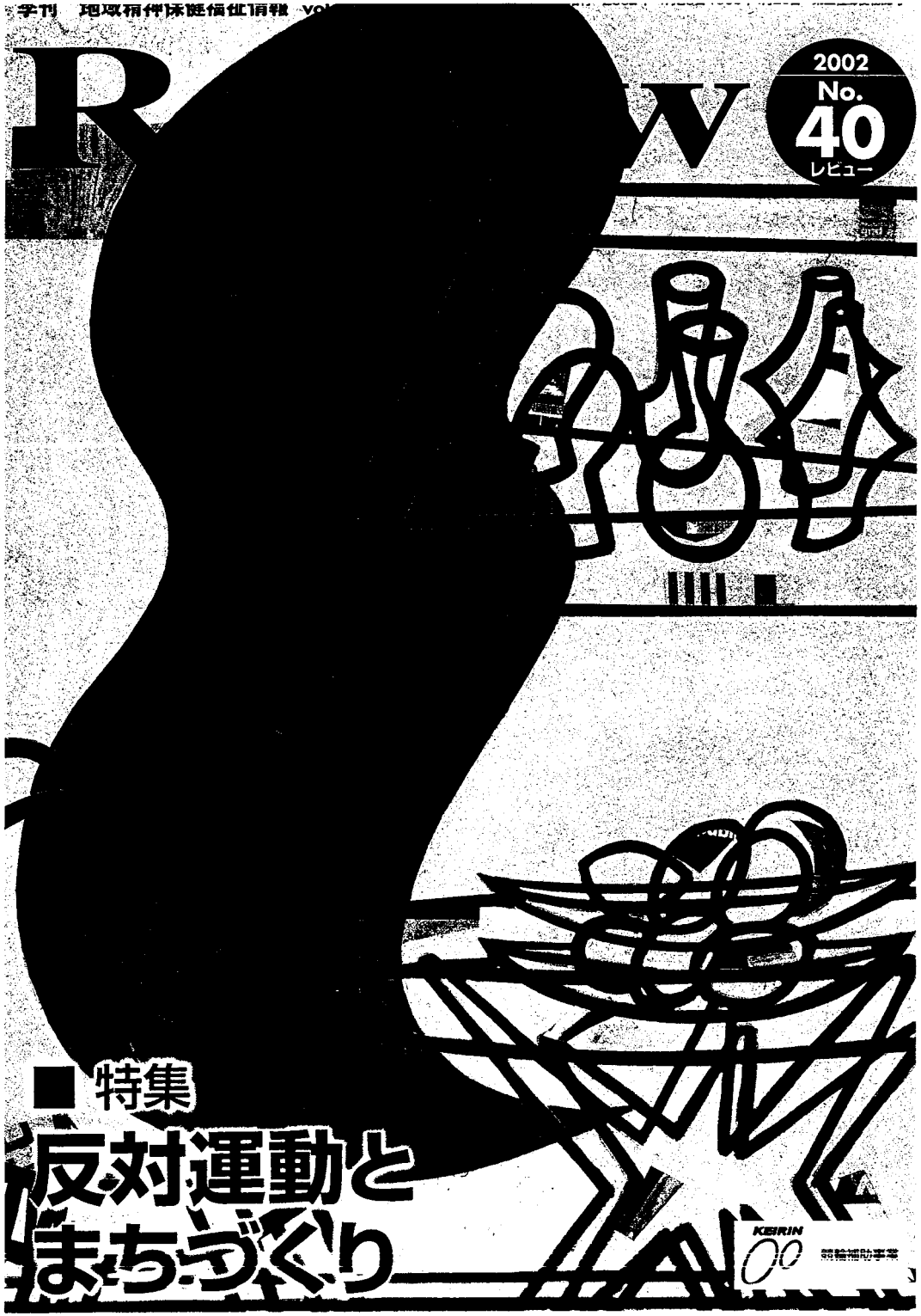
季刊 地域精神保健福祉情報 Vol.



小学校と授産施設のふれあい活動

精神障害者通所授産施設

大任小学校＆のぞみの里

福岡県田川郡大任町

NOTE 小学校の「総合的な学習の時間」に授産施設との「ふれあい活動」が行われた。共に生き、共に学びあう地域づくりにむけて、できることを着実にすすめようという大任小学校とのぞみの里の活動を紹介する。

福岡県田川郡にある大任（おおとう）町は人口約6,200人、自然に囲まれ、もとは炭坑のあった町です。この町にある精神障害者通所授産施設のぞみの里（以下、のぞみの里）と大任小学校のふれあい活動は「総合的な学習の時間」*の試行的な取り組みとして始まりました。大任小学校は全校児童225人で、2001〈平13〉年度は5年生全員34人がのぞみの里と交流をもちました。

活動を知ってもらいたい

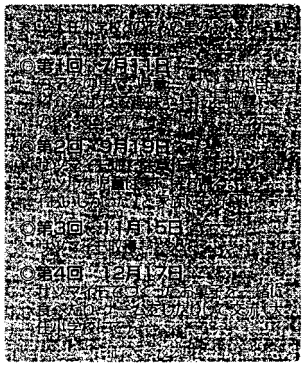
のぞみの里は、'97〈平9〉年4月に開設されました。敷地内のハウスでのシイタケ栽培や、畑で農作業をしています。また、町内の公共施設の草刈りや植木の手入れなどを町から請け負っています。「外に出て、活動している姿を知ってもらいたいと思って、行政からどんどん仕事をもらうようにしてるんですよ」というのは、のぞみの里指導員の永原修二さん。その効果もあって、町の人たちはなんとなく「のぞみの里があること」は知っていました。そうした日頃の目に見える活動があったからこそ、このふれあい活動が実現したといえるでしょう。

のぞみの里指導員 永原修二さん

のぞみの里の施設長が、シイタケの販売と活動紹介を兼ねて大任小学校の前校長を訪問したのが、のぞみの里と学校の最初の接点でした。ちょうど「総合的な学習の時間」が始まることが決まった後で、前校長から「一度施設を見学したい」という話がありました。

まずは教師が学習

ふれあい活動の準備は2001〈平13〉年5月から始まりました。学校と施設の事前打ち合わせで、「教師自身が精神障害について何も知らないことに気づかされた」と教務主任の道高修一さんは言います。



○第1回 7月11日（[illegible]）
[illegible]
○第2回 9月19日（[illegible]）
[illegible]
○第3回 11月16日
[illegible]
○第4回 12月17日（[illegible]）
[illegible]

児童に精神障害についてどのように教えたらいいのか？――その迷いに直面し、「まず自分たちがきちんと理解しなければ」と教師たちが文献等で学習しながら準備を進めました。

交流の内容は全4回、のぞみのサツマイモ畑での作業を中心にすとになりました（表1）。

資料C

資料1　のぞみの里の永原さんが最初に書いた手紙

大任小学校5年生の皆さん。こんにちは。
私は、精神障害者通所授産施設で指導員をしています永原と申します。今回は縁があって、皆さんと交流がもてることになり、大変嬉しく思っています。
さて、皆さんは『のぞみの里』という言葉を聞いたことがありますか？初めて耳にする人も多いのではないでしょうか。
まず初めに、『のぞみの里』について簡単に説明したいと思います。
『のぞみの里』は、精神に障害があり、それでも何とか障害を克服して、仕事がしたい、また、社会の一員として、人と接していきたいという人達が、訓練のために通ってきている場所です。ピンとこないかもしれませんね。
精神障害とは、心の病気のことなのです。
風邪とか、鼻炎とか、腹痛とか、身体の病気は病院で注射や薬で治してもらいますよね。同じように心の病気も、病院で薬を出してもらったり、カウンセリング等で治してもらいます。でも、心の病気は身体の病気のように薬だけでは簡単に治すことは出来ませんし、治療が長びくこともあります。だから、ある程度、病院の治療で症状のおちついた人は、『のぞみの里』のような場所で仕事に復帰できるように訓練するのです。
ひとくちに精神障害といってもいろんな人がいます。そして、何よりも皆さんに判ってほしいのは、精神障害者とは、決して特別な人ではないのです。
人は生きていく上で、様々な悩みをかかえていますよね。それがあまり大きくなったりすると、ある日突然心の病気になったりします。よく耳にする登校拒否とかも、心の病気なんです。
心の病気になるのは、まじめな人、几帳面な人、責任感の強い人、嘘をつけない人が多いようです。まわりからみれば、さぼっているように見えても本人は、一生懸命に頑張ろうとしています。
今、『のぞみの里』には、20名の人が在籍していて、毎日10人程度の人が通ってきています。
『のぞみの里』の中では、自分に出来るだけの仕事を行い、休憩時間などは、パソコン、将棋等で楽しく過ごしています。また、大任町のしじみ祭りや、文化祭等にも参加し、焼きそばや『のぞみの里』で作っている椎茸を販売しています。沢山のいろんな人と交流することはとても大切なことなんです。今回、大任小学校から5年生の皆さんとの交流のお話を頂いた時は、職員もメンバーも嬉しく思いました。
これからサツマイモの収穫にむけて何回か、皆さんと交流を持つことになりますが、その時は、お互いに楽しく想い出を残すようにお願いします。

資料2　書き直しを重ねて児童に配られた手紙

大任小学校の5年生のみなさん、こんにちは!!
私は、「のぞみの里」で指導員をしている永原と申します。
今回、みなさんと交流する機会ができて大変うれしく思っています。
さて、みなさんは「のぞみの里」という言葉を聞いたことがありますか？
初めて耳にする人も多いのではないでしょうか？
まず、はじめに、「のぞみの里」について説明したいと思います。
私たちは、風邪や腹痛とかの病気でお医者さんに行き、注射や薬をもらって治療していますね。また、手や足の骨を折って入院したり、病院に通って治療したりすることもありますね。風邪をひいたり手足を骨折したりする可能性は、誰にでもあります。ところで、みなさんは、心も病気になる場合があることを知っていますか。心の病気も、誰でもかかる可能性があります。悩みごとがたくさんあったり、悩みが大きすぎていやになったりすることはよくあります。人間は生きていく中でさまざまな悩みをかかえています。悩みがあまりにも大きくなったりすると、心の病気になることがあります。心の病気は、病院で薬を出してもらったり、悩みごとを話して相談にのってもらったりして治療をしていきます。
「のぞみの里」は、心の病気にかかった人たちが、仕事に復帰できるように訓練をしているところです。みなさんが学校に来て、大人(社会人)になっていくための勉強をしていることと同じように、毎日通ってきて、仕事をしながらがんばっているところです。
今「のぞみの里」には、20名の方が在籍していて毎日10人程度の人が通ってきています。自分にできるだけの仕事を行い、休憩時間はパソコン、将棋などで楽しく過ごしています。また、大任町のしじみ祭りや文化祭などにも参加し、焼きそばや「のぞみの里」で作っている椎茸を販売しています。たくさんの人と交流することは、とても大切なことです。
今回、大任小学校の5年生のみなさんと交流していくお話をいただいた時、「のぞみの里」の者は、みんなうれしく思いました。
これから、サツマイモの収穫にむけて何回かみなさんと交流していくことになりますが、その時は、お互いに楽しい思い出を残すようにしていきましょう。
どうかよろしくお願いします。

平成13年6月25日

「のぞみの里」　永原修二より

大任小学校5年生のみなさんへ

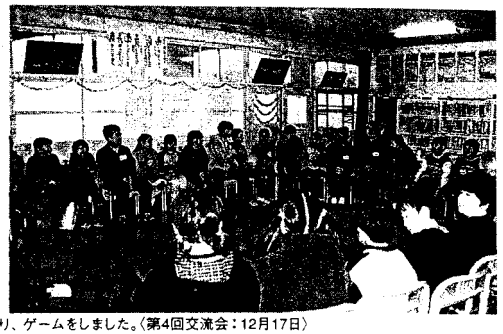
「精神障害」をどう教える？

交流の前に、児童たちには、のぞみの里を紹介する手紙が配られることになっていました。そのために永原さんが書いた手紙には「精神障害」という表現が使ってありました。「それを隠して交流しても意味がない」と永原さんは考え、あえて前面に押し出したのです。けれども、その手紙に学校側から「待った」がかかります。その理由を佐藤校長はこう話します。「大阪池田小学校で事件が起きた直後ということもあって、精神障害という言葉に過剰反応が出ることを案じました。まずは、ふれあって、それから“言葉”を教えるほうがよいと判断したのです」。また、教師側の勉強不足もあったと佐藤校長は言います。「まだ精神障害について児童にどう伝えればいいか迷っていたので、児童を混乱させることになるという思いもありました」。

何度も書き直し、精神障害ではなく「心の病気」という表現にかえた手紙が児童たちの手に渡りました。学校と施設が話し合いを重ね、ふれあい活動を実現させる道を探り合いながらすすめたのでした（資料1・2）。

直接ふれあうことが何より大切

交流の日程が決まった矢先、大阪で池田小学校事件が起こりました。教師たちの間に「このまま交流を進めてよいのかどうか」と、とまどいの声があがりました。永原さんも「正直いって、交流活動が中止になるのではないかと思っていた」と言います。



みんなで収穫したサツマイモのお菓子を食べたり、ゲームをしました。〈第4回交流会：12月17日〉

大任小学校では、職員会議で議論し「差別や偏見をなくす教育の原点を大切にしなくては」と、予定どおり7月11日から、ふれあい活動を始めることに決めました。そして、PTA役員にもふれあい活動を行うことを報告する機会をもちました。PTAの反対があったら、ふれあい活動は続けられないかもしれない、と不安を感じながらその場にのぞんだのです。ところが、PTA会長からは「児童だけでなく、先生たちも交流したらどうか」と、逆に教師たちを力づける言葉が返ってきました。

このPTA会長は永原さんのよく知っている人でした。日頃から地元の人とのつながりを大切にしている永原さんは、前もって力になってもらえるよう、ふれあい活動の意義を会長に熱く語っていたのでした。

そうした経緯もあって、児童たちの交流と並行して教師ものぞみの里と交流することになりました。8月6日に、大任小学校の教師15人がのぞみの里で利用者から直接話を聞きました。利用者は、緊張しながらも病歴や、現在抱えている問題などについて率直に語りました。

交流会後、教師たちは「心の病気をもった方がいることやのぞみの里のような施設があることを子どもたちに伝えていくことの必要性を強く感じるようになった」「周囲に、きちんと伝えられるほどにはよく理解できていなかった。交流を持ったことで、病気のことやのぞみの里の方のことが理解でき、事前の指導や交流もうまく進んだ」などの感想を述べています。教師たちにとっても、直接ふれあうことが大切な機会になったのです。

道であいさつを交わす仲に

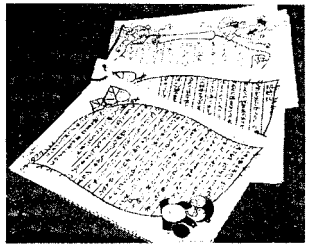
ふれあい活動が始まってから、のぞみの里の人たちが道路脇の草刈りをしていたときのことです。下校途中の児童たちが駆け寄ってきて「のぞみの里のおにいちゃんたちだ！」とあいさつしてくれました。子どもたちが屈託ない笑顔でのぞみの里の人たちとふれあっていることが、この交流の成功を何よりも表していると思う、と佐藤校長は言います。

一方、のぞみの里では、地域の保育園とも交流を持っています。できれば、町内のもうひとつの小学校や中学校とも交流を持っていきたいと永原さんは意欲的です。

理解を広げてまちづくり

精神障害に対する理解を広げるには精神障害者と直接ふれあう体験が何より効果があるといわれています。学校でのこうしたふれあい活動は、理解を広げる多くの可能性を秘めています。

まちづくりの基本が、人と人の関係づくりであるなら、こうした理解を広げる活動そのものが、まちづくりのひとつともいえるでしょう。この大任小学校とのぞみの里のふれあい活動は、学校という身近な場所にその可能性があることを教えてくれた貴重な取り組みといえるのではないでしょうか。



小学校からのぞみの里へ寄せられた手紙

（取材／永井亜紀・丹羽大輔　全家連制作部）

連絡先
〒824-0511
福岡県田川郡大任町大字今任原3401-129
精神障害者通所授産施設のぞみの里
TEL＆FAX0947-63-4567

＊「総合的な学習の時間」とは？
2002（平14）年度から新学習指導要領が実施されます。そこで新たに始まるのが「総合的な学習の時間」です。小中学校ではこの4月から、高校では来年度から本格的に始まります。「国際理解」や「環境」「福祉」などをテーマに各学校ごとに具体的な内容を決めて取り組むことになっています。小学校では年間105～110時間（1週約3時間）、中学校では70～130時間とられています。